マイノリティーの叫び

ースペイン語圏ー

字野 和美

れているのだろう。 英米文学以外の児童文学の本は、 てみると、NDCが九一○番台の日本文学や九三○番台の られた。「この本」というのは、私も編集にかかわった 号のものが、 んどは93で始まるの。この本に載っているようなほ 図書館にも納 『多文化に出会うブックガイド』 Ę 近所の児童書店に立ち寄ったとき、 もっと増えていいのにね」と店長に声をかけ 入しているけれど、注文される翻訳 (読書工房) のこと。 もともと数がずっと限ら 「うち 書のほと んは学校 かの番 考え

り出 の情報が圧倒的に少ないことの反映で、この状況はここ数 た本を見ると、その半分以上がこちらからの スペイン語圏は遠く、 で話されている、世界で四番目に話者の多い言語だが 私の専門であるスペイン語は、 版された本だ。 訳出版 分野ではマイナーな存在だ。 これは、 なじみが薄 出版界におい () 世界の二十一 私自身が 日 てスペイン語 持ち込みによ 本では 翻訳 0 国と地 L してき 般に 日 域

年変わらないようだ。

され、 となのか。 いのはスペイン語圏だからか、それとも実際つまらないこ としている作品もたくさんありそうなのだが、 と、英語圏の作品ならかなり複雑な歴史や社会事情を背景 のか、と考えこんでしまった。 しい分野だが、知りたがらないなら、 ないから」と一蹴されたことがある。 んだとき、ある出版社で「こんなことを読者は知 友情をうたった『約束の丘』(行路社)という作品を持ちこ のは求められるが、舞台背景がやや入り組んでくると敬遠 ほどほどのめずらしさ」だと感じることが多い。 うと「スペインのとかラテンアメリカのとうたえるような、 スペイン語圏の本に関して求められているのは、 を見いだすことは、 を開かれることや、 を導入する難しさをずっと痛感してきた。 の持ちこみにはげむことになるのだが、主流 たとえば、十五世紀のスペインを舞台に、 だから、 全体に関心が薄い。マイノリティーの悲哀である。 翻訳をしようと思えば、 本を読むときのおもしろみの一つだが、 その新しい世界の中に自分との共通項 翻訳文学を見 翻訳者は本探 知らせる価 歴史小説は 未 信仰をこえた では まわしてみる 知 受容され の世界に目 値はな 特殊なも 極端に言 確 りたがら ない文化 しと企画 か に難 1)

と、そこに生きる人びとの喜びや悲しみ、普遍的な人間のだが、日本人にはなじみがない特殊な背景の物語だろう